

椅子と私と図書館と

山岸 瑤果

1990年代以降、滞在型図書館が増え、それに伴い図書館における居住性が重要視されるようになってきた。にもかかわらず、居住性に大きく影響するはずの図書館家具、とりわけ椅子に着目した研究は多くない。そこで本研究は、椅子と「私」が図書館という場をどのように成立させているのかを明らかにすることを目的とする。

椅子と人の関係についてはハイデガーの考えを基にした。ハイデガーは世界を人とモノに大別し、モノは人にとって道具であり、人と人は「共存在」であるとした。椅子と「私」と図書館の三要素がどのように影響しあう可能性があるのか、考えられるすべてのパターンを、数え上げた。それらの中から、研究目的にそぐわないパターンやあまりに複雑すぎるパターンを除外した上で、人から椅子への影響を表わすパターンをハイデガーの捉え方、椅子から人への影響を表わすパターンを山岸の捉え方として分類した。

人が図書館における椅子を意識した時に、椅子・人・図書館の要素間に共存在という関係性をどの程度構築させうるか、被験者実験を通して調査した。実験では椅子・人・図書館が頂点として三角形を描く図を提示し、その要素間それぞれに対して抱くイメージを単語で表現してもらいアンケートを実施した。この表現が共存在的表現か道具的表現か判別し、単語総数に対する共存在的表現の割合を比較する。アンケートは2度行い、図書館における椅子を意識させる前と後で変化をみる。図書館を構成するいくつもの環境要素の内、特に椅子を意識させるために、実験実施機関に既存の椅子1脚と、新規に用意した椅子1脚に座らせた。また、二度目のアンケートは被験者がどの椅子を意識して回答したかを尋ねた。

二度目のアンケートで既存の椅子を意識した被験者も、新規の椅子を意識した被験者も、図書館と椅子、椅子と人の要素間で、共存在的表現の割合が一度目のアンケートより大きくなった。特に新規の椅子を意識した被験者は、椅子と人の要素間の伸び率が高いと特徴が見受けられた。また、同時に図書館と椅子の要素間も割合が高くなっていることに着目すると、新規の椅子と人が共存在という関係性になったことに触発されて、図書館と椅子の割合も伸びた可能性も考えうる。

このような結果を受けて、図書館の環境要素の中でも特に椅子を意識を向けたとき、人と椅子、図書館と椅子、の要素間では共存在としての関係性を見出されることを示すことができた。また、既存の椅子よりも、特別に用意した新規の椅子を意識したほうが、より共存在としての関係性が強くなると示唆された。

(指導教員 宇陀則彦)